

学 位 論 文 要 旨

氏 名 山 中 慶 子

題 目 造形行為を伴う遊びを視座とした遊びと学習との質的な相関についての研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、幼児期の遊びの経験や興味関心が、小学校低学年期の学習へと接続するプロセスを調査・分析することで、幼小接続期の「遊び」と「学習」との質的な相関を明らかにするものである。そのため、12名の子どもの連続した幼小2年間の縦断的調査により、「遊び」と「学習」との活動の共通性について検討する。そのことで、今後の幼児教育と小学校教育との接続において必要な、保育者・教師による子どもの成長を捉える視点や姿勢について明確にすることができると考える。

近年の教育課題として、幼小の連携の強化が挙げられる。しかし、児童が小学校生活にうまく適応できない「小1プロブレム」に代表されるように、個々の連続した学びから派生する問題の究明には至っていない。その理由の一つに、子どもが主体的に遊びや学びに興味を持つとする姿が、幼児期と児童期とで保育者・教師によって切り離されて捉えられていることが挙げられる。そのため、幼小の子どもを分断することなく精緻に観察・分析することによって、「遊び」と「学習」をつなぐための具体的な知見を得ることが喫緊の課題だと考えた。

本研究では、幼小接続のための視座として「造形行為を伴う遊び」に着目する。それは、「人—もの」との双方向的な関係へと目を向けるマテリアル・ターンの考え方を通して、幼小の子どもを連続性を見取ることにも拠るためである。幼児にとって、ものの特性を知り、自分の生活の中で素材を操作したりすることは、自己の世界を広げ、自己形成をしていくことを意味する。つまり、幼児期の「造形行為を伴う遊び」による子どもへの追究は、図画工作科への接続だけでなく、マテリアルを介したすべての学習を包括する幼小接続の視座となる可能性があると考えられる。

第1章では、幼児教育と小学校教育の関係を歴史的な背景から調査するとともに、先行研究の整理から、幼小の子ども「遊び」と「学習」との質的な相関について、「幼児期に面白さを見出した環境との関わりは、類似した領域での学習に影響を与える」、「イメージを視覚化する『遊び』の過程で、目的を自主生成するような『学習』の素地が培われる」の2つの仮説を導きだした。

第2章では、子どもの「造形行為を伴う遊び」への興味と教科学習への興味とに関連があるのかを明らかにすることを目的とし、小学校低学年児対象の質問紙調査を実施した。その結果、①子どもの好む「造形行為を伴う遊び」の特性と、選好教科の学びの特質や学び方に相関性があることが示された。

第3章では、発達過程における環境との関わり方の傾向を明らかにすることを目的とし、牛乳パックピースを用いた実験的観察調査を行った。その結果、①幼児は成熟と経験を重ねるにつれ、社会的な意味をもった他者との相互行為を通して、遊びや表現行為を決定していることが示された。

第4章では、幼児期の模倣行為について二つの調査を行った。第一に、幼児が保育者を模倣する行為の観察調査から、模倣による学びについて考察を行った。その結果、①幼児と材料との出会いの場における保育者の行為は、その後の幼児と材料との関係に影響を与える、②価値ある目的に向かって自らの可能性を追求しようとするとき、幼児は他者を模倣することによって新たなことを学ぶことが示された。第二に、友達関係の変化に伴う模倣行為について、年長女児2名の遊びを1年間観察調査した。その結果、幼児の相互模倣の機能には、①自身のスキーマの変容・発展、②他者との関係性の構築、③関係性の中で生まれた新たな価値を共同的に表現する機能があることが示された。

第5章では、観察の視点を定め、子どもの幼児期と児童期の姿とを比較分析した。その視点とは、「感受・触発の場面」、「『共有』、『模倣』にみる他者との関わり方」である。その結果、①感受・触発の場面は、幼児期と児童期とで類似した傾向がある、②他者との関わり方は、社会性の発達という側面から変化していくことが示された。

第6章では、保育者と教師の、子どもの見取りの傾向を比較分析することで、視点の違いを明らかにし、両者が1人の子どもを見取る意義について検討した。その結果、①子どもを主体として発達を見取ろうとする保育者の意識と、全体の流れから子どもの学びを把握しようとする教師の見取りの違いが明らかになった。そして、②両者の見取りの違いによって、子どもたちの多様な発達が促される可能性が示された。

第7章で、本研究全体を通して得られた知見をまとめた。本研究の成果は、校種を超えた調査により、「遊び」と「学習」の質的な相関を具体的に示すことができたことにある。そして、①能動的な「学習」と「遊び」の起点は、個によって異なる〈感受・触発〉である、②「学習」と「遊び」の共通項は、目的を自主生成することにあることが明らかになった。これにより、今後の幼小接続を「遊び」と「学習」との関係から見るための三つの視点が得られた。

- a. 幼小の違いを肯定的に捉え、共通して子どもの感受・触発の素地を育む視点
- b. 「遊び」と「学習」の動機を重なりとして捉える視点
- c. 多様な価値（保育者と教師の見取りの違い）が子どもの成長を促すという視点

さらに、本研究の知見からは、幼児教育と同様、小学校教育におけるマテリアル・ターンの考え方に基づく物的環境の必要性が示された。